

メキシコ ベラクルス州立大学ギャラリーでの個展開催および創作活動を主軸とした研究の可能性についての基礎的研究

FUNDAMENTAL STUDY OF THE POSSIBILITY OF RESEARCH CENTERED ON SOLO EXHIBITIONS AT THE GALLERY AND CREATIVE ACTIVITIES AT UNIVERSITY OF VERACRUZ, MEXICO

さくま はな 芸術工学部アート・クラフト学科 准教授
谷口 文保 芸術工学部アート・クラフト学科 准教授
中山 玲佳 芸術工学部アート・クラフト学科 助教
山崎 均 芸術工学教育センター 教授

Hana SAKUMA Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Associate Professor
Fumiyasu TANIGUCHI Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Associate Professor
Reika NAKAYAMA Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Assistant Professor
Hitoshi YAMAZAKI Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Professor

要旨

本研究は、創作活動を行うアーティストやデザイナーを研究員として迎え入れ、創作活動そのものを研究活動として認め、国内外で実践的な活動を展開させているベラクルス州立大学造形美術研究所・アートギャラリーを拠点に、①さくまはなと中山玲佳による個展同時開催、②同研究所が行う創作活動を主軸とした研究の現状を明らかにすることを旨とした基礎的研究である。

本稿では、上記個展および中山が参加した壁画プロジェクトの報告を中心に、実際に同ギャラリー・同研究所と連携しながら展覧会づくりに関与したことでみえてきた同ギャラリー・同研究所の現状や地域における役割について明らかにしていく。

Summary

The Research Institute of Visual Arts of University of Veracruz is involved in practical art activities at home and abroad, accepting artists and designers engaged in creative activities as researchers and recognizing creative activities themselves as research activities. This fundamental study aims to clarify the current state of research centered on 1) solo exhibitions concurrently held at the university gallery by Hana Sakuma and Reika Nakayama and 2) creative activities conducted by the institute. In this paper, what will be clarified is the current status of the gallery and the institute and their roles in the local community, which Sakuma and Nakayama have seen by actually being involved in the creation of exhibitions in collaboration with the gallery and the institute, with a focus on a report on the solo exhibitions described above and the mural project in which Reika Nakayama participated.

1. 研究の概要

本研究は、アーティストやデザイナーを研究員として迎え入れ、創作活動そのものを研究活動として捉え、国内外で実践的な活動を展開させている、世界的にも珍しいと評されるベラクルス州立大学同大学造形美術研究所・アートギャラリーと連携体制を取りながら、①さくまはな(代表者)(インスタレーション)と中山玲佳(分担者)(絵画)による作品展示(ベラクルス州立大学ギャラリーRamón Alva de la Canal, 2019年9月4日～29日)、②同研究所が行う創作活動を主軸とした研究の現状を明らかにすることを旨とした基礎的研究である。

2. 活動スケジュール

本研究は、以下のスケジュールで実施された。

表1. 活動スケジュール

| 日時 | 内容 |
|----------|--|
| 4-7 | 州立大学ギャラリーおよび矢作隆一氏(同研究所研究員)との打ち合わせ(オンライン) 展示作品制作・準備・展示計画検討(さくま・中山・山崎)、現地スケジュール調整、渡墨準備共同研究メンバーとの打ち合わせ |
| 8 | 作品完成、作品梱包、各種準備・手続き(さくま・中山) |
| 8月中旬～9初旬 | ベラクルス州ハラパ滞在(さくま・中山) 展示作品調整、現地制作(さくまは作品、中山は壁画プロジェクト参加)、個展搬入準備、展覧会図録作成協力。また、同研究所にてContreras 所長、Anaya 研究員らと面談。個展オープニング、矢作氏担当の授業枠で講義(アーティストトーク)(さくま・中山) |
| 11 | アート・クラフト学科企画展 日墨米3カ国交流展 At The Beginning Of The Journey 旅のはじまりにて展覧会報告展示(さくま・中山) Anaya 教授と3月に行う谷口の現地調査に関する打ち合わせ、および、造形美術研究所のこれまでの歴史的背景に関する事前ヒアリング |
| 11～2 | 3月の谷口による現地調査について準備 |
| 1 | 共同研究中間報告会 報告口頭発表 |
| 3 | 谷口の州立大・造形美術研究所訪問 新型コロナウイルス感染拡大を受けて渡墨を中止 |

3. これまでの経緯

ベラクルス州立大学造形美術研究所との接点

本研究の出発点は、2015年に実施した谷口文保(分担者)による同研究所での海外研修に遡る¹⁾。本研修を機に谷口は同研究所において、a. 展覧会が研究活動としてに認識され学内ギャラリーで頻繁に展覧会が開催されているということ、b. 優れたアーティスト・デザイナーが研究者という位置づけで制作・国内外での発表活動を行っているということを知る。そして、このような国際的にみても珍しいアート&デザイン領域の実践ベースの研究のあり方に触れ、このような研究の方法論自体も研究対象になりうるのではないかと考え

るに至った。その後、2017年度には、そういった実技ベースの研究のあり方に興味をもつ中山・さくまが渡墨、同研究所内ギャラリーで本学 A&C 学科学生版画作品展を開催²⁾。その後も下記の表にある通り、同研究所と継続的に交流を育んできたという背景がある。本研究のさくま・中山の個展については、2017年メキシコから帰国後、2名によって個展の申請が行われ、同大の選考会を経て2018年10月に内諾。その後、山崎に展示計画について助言を仰ぐなどしながら展覧会案をまとめ、オンライン上での打ち合わせを経て、2019年9月に開催された。

表2. ベラクルス州立大学造形美術研究所との交流の歴史

| 日時 | 交流・活動の名称 | 概要 | 場所 |
|---------------|--|---|------------|
| 2015.8-10 | 海外研修(谷口) | 同研究所にて客員教授として研修 | 同研究所(メキシコ) |
| 2017.4-2018.3 | 共同研究 基盤研究 芸術系大学における海外交流展の企画・運営・実施・ファイリングを用いた実践的な学びの場の創出(中山代表) | 同研究所ギャラリーでA&C学科学生による版画交流展 | 同研究所(メキシコ) |
| 2017.12 | 神戸芸術工科大学×メキシコベラクルス州立大学 日墨交流展「ベラクルス州立大学造形美術研究所40周年記念特別展」 | 本学エスパースにて同造形美術研究所メンバーの作品展示 | 本学(日本) |
| 2019.4-2020.3 | 本共同研究(さくま代表) | ベラクルス州立大学ギャラリーでの個展 | 州立大(メキシコ) |
| 2019.12 | 本学「アート・クラフト学科企画 日墨米3カ国交流展 旅のはじまり」"At the Beginning of the Journey" | 本学セレンディップギャラリーにて同研究所メンバーによる作品展示および本個展報告展示 | 日本(日本) |

4. ベラクルス州立大学について

ベラクルス州はメキシコ合衆国の31の州の一つで、メキシコ湾の西岸、メキシコで3番目の人口で、我々が滞在したハラパ市は州都である。ハラパ市には約8万人もの学生が学ぶベラクルス州立大学、国内屈指のハラパ人類学博物館やハラパ交響楽団の活動拠点など、同大学キャンパスや付属の施設などが街のいたるところに点在しており活気で溢れている。また、同大には、生物や農業科学、人文科学、技術科学、ビジネスと経済、芸術などの領域の学部、修士、博士課程の他、研究所があり、造形美術研究所もその中のひとつである³⁾。

同研究所では、現在、本研究の協力者である矢作隆一氏(彫刻家)を含む20人前後の研究者が在籍しており(2020年7月現在)、その全員が絵画、彫刻、版

画、写真、染織、ビジュアルデザイン領域などの現役のアーティストまたはデザイナーであり、同研究所を拠点にメキシコ国内外で作品展示をはじめとする制作・発表を精力的に行っている。

5. ベラクルス州立大学ギャラリー Ramón Alva de la Canal について

さくま・中山の個展の会場となった同ギャラリー Ramón Alva de la Canal (写真1. 2) は、ビジュアルアートの国内および国際的なショーケースとしての機能を有し、同大学の文化的スペースとして 1985 年に設立された。34 年間に渡り、ハラパ中心街の Calle Zamora 27 という場所にあったが、2019 年、同地区の Xalapeños Ilustres 86 (さくま・中山が展示した) へ移転した。

同ギャラリーの施設については、1 階に 7 つの展示空間と中庭があり (2 階はオフィス・作業室・保管庫)、来場者の動線の面からみても大小の部屋がバランスよく配置されている。また、天井が高く開放感があり絵画・彫刻、インスタレーションを展示するアーティストにとっても非常に魅力的な空間となっている。

同ギャラリーディレクター Gustavo Olivares Morales 氏によると、ギャラリーの名称については、ハラパを拠点に発展した前衛運動 “Stridentism” (1921~30) の代表的なアーティストの 1 人である Ramón Alva de la Canal (1892—1985) に敬意を表して名付けられたという。本ギャラリーでは、展覧会を開催するだけでなく、最近では、出品アーティストによるワークショップ、シンポジウム、書籍の発表、音楽制作などが行われ、大学と社会の間で生まれるコミュニティの形成や文化の充実化に貢献している。これまでの 35 年間に約 370 の展覧会が行われ、カナダ、キューバ、アメリカ、コロンビア、フランス、ブルガリア、日本からなど、約 180 名の外国人アーティストの作品が展示され、来場者は約 265,000 名以上にのぼるといふ (2020 年 7 月現在) ⁴。



写真 1.2 2019 年に移転した Ramón Alva de la Canal

6. さくまはな・中山玲佳による作品展示について

さくま・中山の各個展は、以下の要領で開催された。

会期：2019 年 9 月 4 日～29 日

会場：Galeria Ramón Alva de la Canal

準備期間には、同ギャラリー・同研究所メンバーの協力のもと、中山の絵画の木枠作成、展示台貸し出し・塗装、さくまの作品の一部を現地制作、展覧会設営、展覧会図録⁵などを行った。展覧会をより広い観客へ届けようとする為の試み：オープニングセレモニーの際の地元音楽家によるミニコンサートや我々が不在時にギャラリースタッフが使用する小学生を含む地域の方々に対しての作品紹介準備や作品タイトルなどのキャプションのスペイン語翻訳併記の徹底など、展覧会をより幅広い観客層が楽しめる工夫がなされていたのが印象的であった。

6-1. さくまはな個展概略

展覧会タイトル『De un lugar a otro (From one to another)』(写真 3-6)

展示内容：作品タイトル『Sociedad (Society)』ミニチュアのキノコ屋台 19 台。作品タイトル『Caminando por el borde, Xalapa (Walking Along the Border, Xalapa)』真鍮の家 27 点。

本展では、さくまが訪れたアジアやヨーロッパ各地でみかけた屋台を着想源にし、現在も制作し台数が増え続けているミニチュアのキノコ屋台シリーズ、それから、旧来の国境や文化を超えて変容し続ける現代社会における「家」という概念をテーマにした真鍮の家のインスタレーションシリーズを現地制作し発表。これらの作品は一見すると異なるアプローチでつくられているように見えるが、「移動し続けること」「個と社

会の結びつき」「人間の営み」というようなテーマで結ばれている。



写真 3-6. さくまはな 作品展示風景

6-2. 中山玲佳個展概略

展覧会タイトル『Retratos (Portraits)』(写真7-9)
展示内容: アクリル絵具、鉛筆によるキャンバス平面作品「Being near and far」シリーズ5点(145x145cm)とその他ポートレート作品8点(130x97cm、91x73cm)および、紙によるドローイング作品38点。

本展では、「近くて遠い存在たち」を共通テーマに、日常と非日常、現実と夢、内側と外側の関係性に着目し、実在する人物の写真をベースに描いたポートレート作品を展示。



写真 7-9. 中山玲佳 作品展示風景

6-3. 展覧会づくりを通じて

本展は、同ギャラリー・同研究所と連携体制を築きながら無事開催することができ、多くの来場者に恵まれ、同ギャラリー・同研究所メンバーからも好意的な

コメントが寄せられた。また、地元新聞でも展覧会紹介記事が掲載された⁶。本展を通じて、実際に自らが展覧会づくりに関与し、Morales氏やギャラリースタッフらと交流する中で、国際的で学術的な側面がありつつも地元市民、芸術家、音楽家らとの有機的なネットワークを取り入れながらイベントを行うなど、同ギャラリーの地域における文化的役割といったものが具体的にみえてきた。

また、同大におけるアートギャラリーの役割については、本ギャラリーは前述のように国際アーティストによる個展など、一般に広く公開される展覧会に使用されている一方、同研究所のギャラリー(2017年中山代表の共同研究の学生版画交流展の会場⁷)は研究所自主企画・研究成果展など同研究所に寄り添った展覧会や実験的な展示に使用される、といったように2つのギャラリーでの展示を経験することで各ギャラリーに明確な役割があることが分かった。

6-3. 中山玲佳壁画プロジェクト概略

本展に加えて、中山については下記の要領で壁画1点を制作した。

プロジェクト名：同研究所主催 Proyecto Bosque de Niebla ハラパ壁画プロジェクト JAPOMEX

期間：2019年8月12日～30日

壁画：同大学美術学部内通路壁面及び天井に壁画1点
制作体制：中山のアイデアスケッチをベースとし、美術学部教員 Carlos Rios氏と学部生8名と共同で制作。

プロジェクトの概要としては、現地にある森“Bosque de Niebra(霧の森)”をテーマにアーティストがチームになり、大学構内、本屋、BARにて壁画制作を行うものであった⁸。本プロジェクトのように、アーティストが大学機関や一般の業者、店舗とつながり、街中でアートの現場を生み出している状況は非常に興味深い。また、その仲介役を同研究所が担っているということも特記すべき事項である。

7. 同大学造形美術研究所が行う創作活動を主軸とした研究の実態について

前述の通り、同研究所では、アーティストやデザイナーである研究員の作品制作が研究活動として認められている。同研究員の主たる活動は作品制作である為、大学の授業を担当していない研究員もいるという。同研究所研究員である Yosi Anaya氏や矢作隆一氏によると、このような研究機関は、メキシコ国内でもおそらく同研究所のみであるとのことであった。そこで、同研究所が、どのような経緯で設立され、どのように運営されているかを調査することとなった。

まず、2019年11月29日に、本学での展覧会⁹のため来日された Anaya氏に、谷口とさくまが聞き取り調査を実施した。同氏は、テキスタイルアートのアーティストで、同研究所の創設期からのメンバーである。同氏の説明によると、1980年代は研究員達が国内外の展覧会等で活躍し、大変活発であったことが分かった。また、当時の研究員達が、メキシコやベラクルス州の新しい芸術文化を創出していこうとする志を共有していたことが分かった。同氏は、1990年代から創設期のメンバーが徐々に入れ替わり、新しいメンバーが増えて活動が落ち着き、現在は同研究所の将来展望を模索していると語っていた。

その後、2020年3月末に約一週間の旅程で、谷口による同研究所に関する現地調査を実施する計画であった。同調査では、矢作氏の協力によって、Héctor Vinicio Reyes Contreras 所長、Xavier Cózar Angulo氏(前所長)、Anaya氏などに「設立の背景と目的、組織、運営、活動状況、課題、今後の目標など」について詳しくインタビューする予定であった。しかし、2019年12月に中国で発生した新型コロナウイルスが世界的に流行したため、同調査は中止することになった。

8. まとめ

前述のように3月の現地調査はやむなく中止となったが、上記展覧会づくりを介し、ギャラリーディレ

クターとしてハラパのアートシーンを牽引する Morales 氏や長年に渡って創作活動を行い、メキシコの美術史に造詣が深い同研究所 Contreras 所長、そして前述の Anaya 氏、矢作氏らとの交流を通じて、ベラクルス州立大学がその大学機関の役割として先住民コミュニティとの社会的関与や地元市民の芸術文化の発展と振興への支援にコミットしてきたということや、ハラパ市のアートシーンやその成り立ちに同研究所が大きく関わっていることが分かった。

また、前述の中山参加の壁画プロジェクトや研究員の方々の制作現場において「つくることで集い、相互に理解し合う」「質の高い壁画を作成することで地域に新たな価値を与える」「実践を通じて物事を具現化し、新たなビジョンを生み出す」といった創作活動に内在する人を巻き込む力や物事を推し進める力を最大限に活かして意欲的に活動される様子を垣間見ることができたことも収穫であり、同研究所の創作活動を主軸とした研究が地域社会と結びつき、活気あるハラパ市を文化的に支えていることが理解できた。今後もこれまでの成果を踏まえつつ、引き続き、実技の実践を介した交流を続けていきたいと考える。

謝辞 ベラクルス州立大学ギャラリーディレクター Gustavo Olivares Morales 氏、同大造形美術研究所 Héctor Vinicio Reyes Contreras 所長、Xavier Cózar Angulo 研究員(前所長)、矢作隆一研究員、Yosi Anaya 研究員、Gerardo Vargas 研究員、同大美術学部教員 Carlos Rios 氏、玉川絵理氏、同大有志学生、ボランティアスタッフの皆様を含む本研究にご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げます。

注釈

- ¹ 谷口文保、「メキシコにおけるコミュニティと共創する芸術創造に関する研究」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』2016
- ² 中山玲佳・さくまはな・谷口文保、「基盤研究～芸術系大学における海外交流展の企画・運営・実施・ファイリングを用いた実践的な学びの場の創出～」、神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』2018
- ³ ベラクルス州立大学ホームページ
<https://www.uv.mx/universidad/presentacion/>
 (2020年7月14日最終アクセス)
- ⁴ ギャラリーディレクター Gustavo Olivares Morales 氏からの情報提供による
- ⁵ 展覧会図録『Hana Sakuma De un lugar a otro』『Reika Nakayama Retratos』16 ページ スペイン語・日本語制作：Galeria Ramón Alva de la Canal が発行された。
- ⁶ “Exposiciones Arte japonés, en la Galería RAC Maribel Sánchez” 地元新聞 *CIRCULOS*, Veracruz 4th Sep 2019 版にて本展と矢作氏による同時開催個展の紹介記事が掲載された。
- ⁷ 2017年9月にベラクルス州立大学造形美術研究所にて「MERCADO-市場」をテーマにアート・クラフト学科学生が制作した紙版画を展示。
- ⁸ 造形美術研究所主催 Proyecto Bosque de Niebla ハラパ壁画プロジェクト JAPOMEX インスタグラム
<https://www.instagram.com/muralesdeniebla/?igshid=10139cyvjvkn0> (2020年7月14日最終アクセス)
- ⁹ 「アート・クラフト学科企画 日墨米 3 カ国交流展 At The Beginning Of The Journey 旅のはじまり」2019年12月2日～6日開催、学科パンフ、2020年度版、p.7-8 に展覧会紹介記事が掲載された。